【第17回大会報告記 世界文学としての芥川龍之介―「藪の中」100周年を迎えて―】

第1日目

報告　　香川　雅子

第17回国際芥川龍之介学会第1日目は、9月24日（土）に専修大学神田キャンパス（10号館）およびオンラインのハイブリッド形式で行われた。資料はSlackで共有された。

午前の第Ⅰ部は、髙橋龍夫会長の開会の辞に続き、今野哲氏（日本体育大学）の司会で、二名の個人発表が行われた。林悦氏（フェリス女学院大学）による「芥川龍之介『南京の基督』論―秦淮娼婦としての宋金花の古典性―」、梅定娥氏（中国南京郵電大学）の「『南京の基督』における「南京」」である。

林氏は、主人公の宋金花は儒教の影響を受け「孝」「義」の性格を持っていることと、物語の進行部分は道教の「陰」「陽」に結び付けて考えられると論証した。

梅氏は、「南京の基督は、南京市を訪れた基督なのか」と問題提起し、幕末の日本人が描いた「南京」を主題とする資料を提示した。そして、資料に見る異国情緒あふれる南京市と、当時の南京市の違いを解説した。その結果、基督には西洋的要素はなく、中国人を代表する宋金花の想像した基督であると結論付けた。

昼食休憩をはさんだ第Ⅱ部の「特集 「藪の中」100周年を迎えて―」では、髙橋龍夫氏の司会により、三名の個人発表と一組の団体発表が行われた。それぞれの持ち時間は20分で、その後70分の質疑応答が行われた。個人発表は蘇敏氏（大連海事大学）「フェミニズムから見る『藪の中』における女性像」、張秀瑩氏（大連外国語大学）「還元不可能な複数性―『藪の中』のポストモダニティについて―」、大石富美氏（久留米大学）「「藪の中」の映画化作品およびハリウッド・リメイク作の比較」であった。団体発表は、蔡佩青氏、魏世杰氏、彭春陽氏（淡江大学）「真相は「藪の中」―テキスト含意認識モデルを用いた証言関連分析―」である。

蘇氏は、新しい〈真砂〉像を発見することを目的に、材源として『今昔物語』『指輪と本』『月明かりの小道』と「藪の中」とを比較した。そして、従来、悪女とされた〈真砂〉をフェミニズムの視点から分析し、男性中心の体制に抵抗する女性として捉えなおした。

張氏は「藪の中」を、『今昔物語』を再構築した作品であると考察した。さらに『存在と時間』に言及し、自分を対象化しにくい人間には、客観的な描写は不可能である。それゆえ、『藪の中』では、物語を統括する語り手ではなく、複数の語り手を登場させたと結んだ。

大石氏は『藪の中』と、映画『羅生門』『暴行』とを比較し、それぞれの作品は、発表された時代や社会背景によって変化していると分析した。

団体発表では、三名を代表して蔡氏が発表した。ここでは、AI応用研究から「藪の中」を分析し、迷宮事件の犯人を多襄丸と特定した。方法として、青空文庫の「藪の中」をDeepL翻訳で英文にし、含意・矛盾・無関係（中立）の三項目にあてはめ、文章や文言の比較を行った。今回は、英語をテクストとして用いたが、今後、日本語での分析が待たれる。

発表後、会場からは、芥川に関する研究が国際化している現状をふまえ、最新の研究成果を海外の研究者と共有し、議論したいという要望が出た。どのような方法で発信していくのかが今後の課題となった。

報告　　田村　修一

今大会１日目の最後（第Ⅲ部）を飾ったのは、関口安義先生によるご講演であった。題目は、「新しい芥川像の創造―芥川研究 50 年―」。

私が関口先生にお目にかかったのは、2015 年の本学会創立 10 周年記念の東京大会以来、7 年ぶりのことであった。関口先生も随分お年を召されたな、というのがお姿を最初に拝見したときの正直な印象であった。しかし、壇上に上がられてご講演が始まると、独特なアクセントのつけ方でメリハリをつけ、聴衆を引き付ける語り口（「関口節」とお呼びしてもいいのでは）はご健在で、90 分に渡る長丁場の講演を聞き手に退屈させることなく立派に成し遂げられたのは、さすが関口先生と舌を巻かされるものであった。私は会誌『芥川龍之介研究』の次号の編集に関わることになり、ご講演の原稿の寄稿依頼にかかわって、その後関口先生とメールのやり取りをしたのであるが、先生によれば、「あの日は雨が激しく降り、体調もよくなかったのですが、専修大学神田校舎近くのコンビニでコーヒーを飲み、講演に臨んだ次第です。まあ、講演は慣れていますので、壇に立つならば、しゃんとします」とのことであった。

ご講演の内容は、関口先生のご著書から学んだ者にとっては、既視感のある印象もあったが、50 年間のご研究のエッセンスがコンパクトに、見事にまとめられたものであった。特に、導入部分では関口先生が芥川に関心をもたれるきっかけとなった友人「伊藤啓一」君への思いが切々と語られ、感動的であった。また宮本顕治の「敗北の文学」以来、芥川龍之介にはネガティブな評価の付きまとう歴史があることは否めないことであり、関口先生のご研究が、そのような見方への「闘いの生涯」であったことも再認識させられた。

大会会場で関口先生のご講演の報告原稿執筆の依頼を受け、締め切りは来年 3 月ということで先延ばしにしていたところ、思いもよらぬ関口先生のご訃報を知らされることになった。この報告書はそのあと（2023 年 2 月）に記したものである。なお、関口先生の今大会の講演筆録は、『芥川龍之介研究』第 17 号に掲載予定である。

第2日目

報告　　吉成　大輔

大会2日目は、前日同様対面のほかSlackとZoomを活用したオンライン形式で実施され、個

人発表とシンポジウムがおこなわれた。

個人発表③の李欣氏「芥川龍之介と中国絵画－『鬼趣図』』像の生成をめぐって」では、中国明清期画家と芥川との関連が、書簡や絵画の図像を用いて紹介された。『鬼趣図』と作者・羅聘に着目し、芥川がこの時代の中国絵画を（趣味的な範疇にとどまらず）芸術観・人生観においても意識していたとする考察は、今後の同分野の研究における新しい可能性を提示した。

個人発表④の秦剛氏「「馬の脚」の歴史的コンテクスト－その変身譚の必然性をめぐって」は、典拠の特定、日露戦争というコード、「将軍」との相関、そして特に作中にあらわれる現地紙『順天時報』が発信していた日本主義的な言説への批判意識といった諸要素を丁寧に結びつけた発表であった。日本と中国における支配／被支配の構造を映し出す「北京在住の日本人コミュニティ」を、芥川がいかに巧みに寓話化していたかということについて、認識を新たにさせられた。

個人発表⑤の邵若晨氏「百年を超えた中国記憶－『支那游記』から『ストレンジャー～上海の芥川龍之介』へ－」は、2019年に制作されたNHKのスペシャルドラマから「支那游記」の新しい解読の可能性を見いだすという、独創的な試みであった。「日中の精神的交流を世界に向けて発信」する、というメッセージとともに発信されたこのドラマを、我々はどう「受信」すべきか。発表者がおこなったという監督へのインタビューの詳細などを通じて、さらに視界が開けていくことを期待したい。

個人発表⑥の藤原まみ氏「ラフカディオ・ハーンを介した、芥川龍之介のフランス語文学受容について－‘LE PIED DE MOMIE’,‘THE MUMMY’S FOOT’,‘INGWA-BANASHI’と「馬の脚」との対比的読解の試み－」では、「断片化した身体が身体全体と融合する」話の寓意について鋭い考察がおこなわれた。「切断される身体－融合する身体」という表象は、他者としての異文化をどう抱合し、あるいは拒絶したかという歴史を読み解く重要な手がかりになりうる。秦剛氏の発表と合わせ、「馬の脚」から見いだせるものはまだまだ尽きそうにない。

後半のシンポジウムでは、「「世界文学」は芥川研究に何をもたらすか」をテーマに、議論が展開された。

そもそも「芥川龍之介は世界文学である」のか。小谷瑛輔氏の趣旨説明では、様々な文脈で生成されてきた従来の「芥川世界文学」言説の内実が検証され、この概念を正面から考え直す必要性が確認された。

奥彩子氏は「世界文学の現在」と題し、最新の「世界文学」研究動向を紹介し、国家間の力学が反映されている「世界文学」という概念をどのように現在の問題として捉え直すか、という問いを提示した。

小谷瑛輔氏は「「世界文学という夢」－芥川龍之介は世界文学のカノンなのか？」と題

し、「世界文学作家」としての芥川のイメージが「作られた」ものであることを明らかにし、このイメージを既成事実とする風潮に警鐘を鳴らした。「世界（欧米諸国）に認められたい」という、日本人にしばしば見られる「願望」は、特定の地域（東アジア諸国）との特殊な結びつきへの認識を後退させる危険をはらんでいる。芥川研究に限らず、国内の研究者に対する重要な問題提起がなされたように思う。

澤西祐典氏の「芥川旧蔵書からみる世界文学」は、芥川が各国の文学作品を再生産し「世界文学」化させた状況を確認すると共に、芥川自身の「世界文学」への眼差しを、綿密な芥川の蔵書調査を通して具体的に捉えた。カノンとしての叢書『Everyman's library』への興味や、蔵書への個人的な書き込みは、芥川がどのようなものを「世界文学」をどう考えていたかと知る手がかりとなり得る。会場では「芥川の読書のあり方はフラットで手当たり次第といえるものだった」という従来の認識をふまえ、討議がおこなわれた。

鵜戸聡氏「ハルキとアクタガワは同じ「世界」にいるのか？－「世界文学」を逆手にとる方法」では、芥川作品の「世界文学化」を目指すとすれば「日本的な」文学の精髄としてなのか、グローバルで「普遍的」な物語としてなのか、さらにはその「普遍性」自体がそもそも覇権国家であるアメリカや欧州列国といった「中心」によって形作られたものなのではないか、という問いが提出された。テクスト自体が他のテクストに与え／与えられる影響に加え、異なる価値体系に置かれた時に発生する新たな読みがテクストを豊かにするという発想は、これからの「世界文学」を考える上で重要なものであろう。

今大会の「世界文学としての芥川龍之介」というテーマは、芥川文学のみならず、日本文学の世界における「本当の位置」を認識するうえで、非常に意義深いものであった。

一方で、「世界文学化」の障壁ともなりうる「東アジアとの歴史的・文化的結びつき」こそが芥川文学の価値であり、魅力であることも再認識させられた。本大会における中国の研究者の方々による意欲的な発表は、その結びつきを体現していたように思う。

最後に、困難な状況の中、大会を成功に導かれた委員の方々や会場校の皆様に、深く感謝申し上げたい。

ご執筆者のみなさまのご協力に感謝申し上げます。掲載に際しまして、原則そのままですが、明らかな誤字や体裁などを直しております。ご了承ください。